

日本語における遊離数量詞と先行詞の 意味関係について*

田 中 秀 毅

Semantic Relationships between Floating Quantifiers and Their Host Noun Phrases in Japanese

Hideki Tanaka

Abstract

Quantifier float (Q-float) in Japanese has been drawing the interest of linguists since the late 1960s. Early studies on floating quantifiers (FQs) were mainly concerned with the syntactic treatment of FQs, namely the question of how to deal syntactically with the variation in the location of FQs. After four decades of addressing this question, recent syntactic analyses of FQs have led to two conflicting views: one is that FQs are the result of the movement of their host NPs (i.e. NPs that FQs are associated with); and the other is that FQs are base-generated, like adverbs.

Another trend in the study of FQs is concerned with their semantic

* 詳細かつ有益なコメントをくださった査読審査員の先生に感謝の意を表したい。なお、本稿の不備や誤りはすべて筆者の責任によるものである。本研究は平成21年度科学研究費補助金の助成を受けている（「数量表現を伴う関係詞節の統語的・意味的機能の研究」（科研費（20652034）））。

and pragmatic properties, such as the interpretation of Q-float sentences, the semantic relationship between FQs and their host NPs and the discourse function of FQs. Semantic studies of FQs date back to Muraki (1974) and Inoue (1978), both of whom observed that the definiteness of host NPs of FQs affects the interpretation of Q-float sentences. Because the main purpose of those studies was to argue against movement analyses of FQs, it was sufficient for them to show that Q-float sentences and non-Q-float counterparts are different in the interpretation of FQs. Thus, the study of the semantics of FQs did not develop further.

The purpose of this paper is to examine the semantic relationship between FQs and their host NPs. I argue that there are two possible semantic relationships between them: group-member relations and kind-instance relations. The interpretation depends on the boundedness of host NPs. I also review Tanaka's (2000b) observation that an FQ is not permitted when its host NP is modified by a relative clause whose logical relationship to the main clause is that of reason. I will attempt to explain the origin of the semantic restriction.

1. は じ め に

本稿は日本語の「数量詞遊離」について論じる。つぎの例は下線部の数量詞（厳密には「数詞」）であるが、関連文献における用語法に倣って「数量詞」と呼ぶ）の位置が異なる。

- (1) a. 昔ある所に [三匹の子豚] が住んでいました。[Q ノ NC]
- b. 昔ある所に [子豚] が [三匹] 住んでいました。[NCQ]

奥津 (1996a; 1996b) は (1a) の形式を「Q ノ NC 型」、(1b) の形式を「NCQ 型」と呼んでいる。Q ノ NC 型では、連体数量詞 (Q) が助詞

「の」を介して名詞（N）と名詞句を構成し、格助詞（C）を伴っている。NCQ 型では、数量詞（Q）がその量化対象の名詞（N）から離れ、格助詞（C）の後ろに生じている。数量詞が量化対象の名詞から離れた位置に生じる現象を数量詞遊離と呼び、そのような数量詞を「遊離数量詞」（floating quantifier）（以下 FQ）と呼ぶ¹⁾。

FQ を統語論的にどうとらえるか、すなわち FQ とその量化対象の名詞（一般に「先行詞」と呼ばれる）を移動操作で関連づけるか否か、については60年代末から活発に議論されてきた（奥津（1969），神尾（1977），井上（1977；1978）ほか²⁾）。近年の研究では「遊離」という用語を継承しながら FQ を基底生成する立場をとることが少なくない（本稿でも「遊離」という用語を用いるが、数量詞の移動を前提としているのではないことを断っておく）。また、その関心は FQ の統語論的な側面だけでなく、意味論的な側面にも向けられている。

本稿も FQ の意味機能について考察する。日本語の FQ の分析では、(1) における「子豚」のように先行詞が不定名詞であるのが一般的だが、Muraki (1974) や井上（1977；1978）は FQ の先行詞が定名詞である場合に注目している。

- (2) a. あの三本の鉛筆を買っています。(Muraki (1974: 113) の (17))
 b. あの鉛筆を三本買っています。(Muraki (1974: 113) の (18))³⁾

Muraki (1974) は (2a) の連体数量詞文（Q ノ NC 型）と (2b) の数量詞遊離文（NCQ 型）は同義でないとし、それぞれ (3a) と (3b) の英文に対応させている。

- (3) a. He is buying those three pencils.
 b. He is buying three of those pencils.

(3a) では指示詞 *those* は数量詞を含む名詞句 *three pencils* にかかるが、(3b) では名詞 *pencils* のみにかかっている。

また、井上 (1977) は数量詞の量化対象が関係詞節を伴った場合を取り上げ、連体数量詞文と遊離数量詞文で解釈が異なると主張している。

- (4) a. 前を走っていた二台の乗用車がつかまった。
- b. 前を走っていた乗用車が二台つかまった。

(4a) は「二台の乗用車」が前を走っていてつかまったと解釈されるが、(4b) はつかまった「二台」が「前を走っていた乗用車」の一部であると解釈される⁴⁾。

本研究の目的は、定名詞を先行詞とする FQ が先行詞とどのような意味関係を結ぶのか考察することである。また Q / NC 型や NQC 型との比較も行い、形式の違いによって数量詞とその量化対象の名詞が結ぶ意味関係にどのような違いが生じるかについても考察する。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では先行研究を概観する。第3節では数量詞遊離文 (NCQ 型) において FQ と定名詞句の先行詞が結ぶ意味関係について考察する。第4節では NQC 型を取り上げ、数量詞と量化対象の名詞の意味関係について考察する。第5節では数量詞の量化対象の名詞が関係詞節伴う場合に焦点を当て、関係詞節と主節の内容の論理関係によって数量詞の出現位置が制限されることをみる。第6節では結論を述べる。

2. 先 行 研 究

本節では先行研究として田中 (2001) と加藤 (2003) を取り上げ、その論点を要約する。

2.1 田中 (2001)

田中は FQ の先行詞が定名詞か不定名詞かによって文解釈に違いが生じると指摘している。

- (5) a. 僕はそのりんごを 3 つ食べた。(田中の (9a))
 b. 僕はりんごを 3 つ食べた。(田中の (9a))

(5a) は FQ 「3 つ」の先行詞が特定名詞句「そのりんご」で、4 つ以上あるりんごのうちの一部を食べたと読める。これを「部分－全体の関係にもとづく読み（以下、「部分読み」と略す）」と呼ぶ。これに対して、(5b) は FQ の先行詞が不特定名詞「りんご」であり、FQ が一部分を指すかどうかは問題にならず、食べたりんごの個数が三個であることを表している。この読みを「タイプ－トークンの関係にもとづく読み（以下、「トークン読み」と略す）」と呼ぶ⁵⁾。

さらに、田中 (2001) はつぎの数量詞遊離文について「チョムスキーの本」の解釈によって二つの文解釈があると指摘している。

- (6) チョムスキーの本を 2 冊読んだ。(田中の (1a))

一つは部分読みで FQ 「2 冊」は先行詞である「チョムスキーの本」の一部分を指す（チョムスキーの本は少なくとも 3 タイトル以上）。もう一つはトークン読みで、「チョムスキーの本」はタイプ解釈され、FQ がそのトークンを指す（チョムスキーの本について読んだタイトル数が 2 つ）。

田中は FQ の先行詞が特定名詞句のように「数量的な境界」をもつ場合、すなわち「有界的」(bounded) である場合には FQ は部分数量を表し、FQ の先行詞が不特定名詞やタイプ名詞のように「数量的な境界」をもたない場合、すなわち「非有界的」(unbounded) である場合には FQ は合計数量を表すとしている⁶⁾。

FQ の部分読みとトークン読みが文解釈に影響を与える例をもう一つみ

る。「半分」は常に部分読みを要求する「割合数量詞」である⁷⁾。「半分」は全体の数量が定まってはじめて意味をなす。この語彙特性により割合数量詞は量化対象として特定名詞句はとれるが、不特定名詞句やタイプ名詞はとれない。つぎのように割合数量詞「半分」を関係詞節に埋め込んだ例を考えてみるとわかりやすい。

- (7) a. [花子が半分飲んだ] ビールはぬるかった。(田中の (15))
 b.?*[花子が半分飲んだ] ビールを買いに行った。(田中の (16))

この例では数量詞の量化対象である「ビール」は特定名詞句の解釈を受ける。主節の述語「ぬるい」は一時的な状態を記述する述語（「場面述語」(stage-level predicate)）なので特定名詞句と意味的に整合する（cf. Kaga (1991)）。一方、(7b)では買う対象として花子が飲んだ特定のビール（トークン）を問題にしているため不自然になる⁸⁾。

以上をふまえると、FQの解釈は、FQの語彙特性、先行詞の解釈、共起する動詞の語彙特性の相関によって決まると言える。

2.2 加藤 (2003)

加藤はつぎの対話例におけるFQ「二冊」と先行詞の意味関係を分析している（「」は発話を表す）。

- (8) 「昨日、何してた?」「本屋に行って、前から欲しかった本を二冊買って、それから家でテレビを見ながらごろごろしてた」(加藤の (199))

FQの先行詞「前から欲しかった本」は関係詞節を伴う複合名詞句で、定名詞句の解釈を受けている。(8)の解釈について加藤(2003: 461)はつぎのように述べている（丸数字付きの下線部は筆者による）。

少なくともそれ（「前から欲しかった本」）は二冊以上であることはわかるが、何冊かは特定できない。①欲しいと思っていた十冊の本のうちの二冊という可能性あり、また、②欲しいと思っていた二冊をいずれも買ったのかもしれず、特定は不可能である。

下線部①は FQ の部分読み、下線部②は FQ が先行詞の指示物の総数を表す読み（以下、「総数読み」と略す）に相当する。つぎのように FQ に助詞を添えて言い換えると②の意味が明確になる。

(9) 前から欲しかった本を二冊とも買って…

「とも」は「すべて」を表す副助詞である。FQ に「とも」を付加すると全称的になり、結果として FQ が先行詞の指示対象の総数を表すようになる⁹⁾。

また、加藤（2003）は数量詞の量化対象が定名詞句である場合に「集合的認知」と「離散的認知」の差異が文解釈に影響する場合があると述べている。「集合的認知」とは「有機的連関のある集合と捉える認知の仕方」を指し、「離散的認知」とは「有機的連関性を持たない複数の（あるいは一定量の）存在と見る捉え方」を指す。加藤は、連体数量詞が集合的認知を、FQ が離散的認知を反映するという仮説を立て、つぎの文法対立を説明する。

- (10) a. 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、その二台のパソコンが突然故障した。（加藤の（175））
 b. 私の研究室にはパソコンが二台ある。^{*}今朝、そのパソコンが二台突然故障した。（加藤の（176））¹⁰⁾

第一文でパソコンが二台あることが述べられ、そのパソコンを集合的に認知する根拠が与えられている。よって、第二文では（10a）の連体数量

詞は許容されるが、(10b)の FQ は容認されない。

反対に、集合的認知の根拠なしに連体数量詞を用いると容認性が低下することがつぎの例で示される（「 」は発話を表す）。

- (11) a. *「5 個のリングが欲しいんですが。」（加藤の (169)）
 b. 「リングが 5 個欲しいんですが。」（加藤の (170)）

青果店でりんごを購入する場面では、先行文脈なしに (11a) のように連体数量詞を用いた場合、集合的認知の根拠が共有知識に存在しないため不自然となる。逆に (11b) のように FQ を用いた発話は容認される。

「集合的認知」と「離散的認知」の違いをふまえたうえで定名詞句と FQ の関係をみてみよう。

- (12) a. その三本の鉛筆を買う。（加藤の (202)）
 b. その鉛筆を三本買う。（加藤の (203)）

加藤によれば、(12a) では指示詞「その」は集合的認知も含んだ名詞句「三本の鉛筆」全体を定名詞化しており、(12b) では FQ の先行詞である「鉛筆」のみを定名詞化している。加藤は (12a) の定名詞句「その三本の鉛筆」は、不定名詞句「三本の鉛筆」と同様、集合的認知の根拠が必要であるとし、(12b) の定名詞句「その鉛筆」は種類のみが指定されると述べている。つぎの例ではこれらが満たされないため容認性が低下する。

- (13) a. その文房具店には十本しか鉛筆がなかった。*私はその三本の鉛筆を買った。
 b. *その人を三人呼んだ。

(13a) では、第一文で「十本の鉛筆」が集合的認知の根拠を与えられる

が、第二文の連体数量詞は「三本」で問題にする集合が異なるため、容認されない。また、(13b)では「その人」は特定の人(「唯一存在」)と解釈され、FQ「三人」と矛盾を起こすために許容されない。

2.3 先行研究の分類

本節と第1節でみた先行研究をFQと先行詞の意味関係の観点で分類するとつぎのようになる。

- (14) a. FQは先行詞(定名詞句)の指示対象の一部分を指す。Muraki (1974), 井上(1978), 田中(2001)
- b. FQは先行詞(定名詞句)の指示対象の一部分または全体を指す。加藤(2003)
- c. FQの先行詞(定名詞句)はタイプ(種類)を指し、FQはそのトークンを指す。田中(2001), 加藤(2003)

分析の対立がみられるのは、(14a)と(14b)である。すなわち、数量詞遊離文において部分読みのみが可能か、それとも部分読みと総数読みのどちらも可能かという点である。そこで次節では定名詞句を先行詞とするFQの解釈に焦点を当てることにする。

3. 定名詞句からのFQとその解釈

本節ではFQとその先行詞の意味関係を部分－全体の関係とタイプ－トークン関係に分けて考察する。

3.1 部分－全体の関係

FQの先行詞が特定名詞の解釈を受ける場合、部分読みが得られる。

- (15) [前を走っていた]乗用車が二台つかまった。(=(4b))

FQ「二台」は「前を走っていた乗用車」の一部分を指している。この解釈はつぎのように部分構造「NのQ」の形式で言い換えられる。

(16) [_N 前を走っていた乗用車] の [_Q 二台] がつかまった。

この構造ではNの総数はQよりも大きくなければならない。

また、高見（1998）も FQ の先行詞が特定名詞句の場合、FQ はその一部分を指し、連体数量詞の場合とは異なることを指摘している。

- (17) a. 僕はそのまんじゅうを二つ食べた。（まんじゅうは三つ以上）
 b. 僕はその二つのまんじゅうを食べた。（まんじゅうは二つのみ）

(17a) は数量詞遊離文で FQ「二つ」は先行詞の「そのまんじゅう」の一部分を指す。すなわち、まんじゅうの総数は三つ以上でなければならない。これに対して、(17b) の連体数量詞構文では「二つのまんじゅう」が定名詞化していることから明らかなように、まんじゅうの総数は二つになる。

FQ が先行詞の指示対象の一部分を指すことは明らかであるが、FQ の総数読みについては常に可能とは限らないことに注意すべきである。大木（1987）が指摘するように、あらかじめ定名詞の数量が明示されている場合には FQ は常にそれよりも小さい数量（つまり、部分）を指さなければならない。

- (18) 昨日、母がケーキを2個買って来た。（大木の（19））
 a. * 今日、私はそのケーキを2個食べてしまった。
 b. 今日、私はそのケーキを1個食べてしまった。

(18a) では母が買ってきたケーキの総数と FQ の指す数量が等しくなっ

てしまうが、(18b) では当該ケーキの総数が FQ の指す数量よりも大きい。この文法対立から、FQ が先行詞の指示対象の一部分を指さなければならぬことがわかる。(18a) のおかしさは、つぎの文のおかしさに等しい。

(19) 昨日、母がケーキを 2 個買って来た。

* 今日、私はそのケーキ (のうちの) の 2 個を食べてしまった。

「そのケーキの 2 個」は部分構造であり、先行する名詞句が定なので数量詞はその指示物の一部分を指さなければならない¹¹⁾。したがって「そのケーキ」は少なくとも 3 個以上あることが前提となるため、ケーキの総数が 2 個であると述べている第一文と意味的に整合しない。

では、先にみた (8) ((20) として再掲) において FQ に部分読みだけでなく、総数読みが可能である事実はどうに説明されるのだろうか。

(20) 「昨日、何してた?」「本屋に行って、前から欲しかった本を二冊買って、それから家でテレビを見ながらごろごろしてた」

実は、総数読みでは FQ と先行詞は部分－全体の関係ではなく、§3.2 でみるタイプ－トークン関係になっている。要するに、「前から欲しかった本」はタイプ名詞の解釈を受け、FQ 「二冊」がそのトークンを指しているのである。

(18) と (20) が FQ の総数読みの有無について異なるのは、前者では「そのケーキ」が特定名詞句で「母が買って来た二個のケーキ」を指すのに対し、後者の「前から欲しかった本」は特定名詞句の解釈とタイプ名詞の解釈が可能だからである。FQ が先行詞 (タイプ) のトークンを指す解釈では、田中 (2001) の言うように、先行詞の指示対象が非有界であるため、FQ の部分読みが得られないのである。

以上の考察をまとめるとつぎようになる。

NCQ 型文（数量詞遊離文）	NとQの意味関係
そのケーキを二個食べてしまった。	全体－部分
前から欲しかった本を二冊買った。	全体－部分
	タイプ－トークン

3.2 タイプトークンの関係

定名詞句を先行詞とする FQ は、先行詞が指すタイプに対するトークンの数量を指すことができる。「その鉛筆を三本買う」を例にとると、「その鉛筆」はタイプ名詞で鉛筆の種類を表し、FQ はそのトークンの数量を表す。この解釈では、「その鉛筆」は特定の鉛筆ではなく、鉛筆の種類を指しているので「その鉛筆」が何本あるかは問題にならない（部分－全体の関係の解釈では、「その鉛筆」は複数の個別の鉛筆の集合を指すため、少なくとも三本以上なければ成立しない）。

定名詞句がタイプ名詞の解釈をうけることについては、つぎの例がわかりやすい。

(21) その鉛筆をください。

この文では定名詞句「その鉛筆」の解釈があいまい（ambiguous）である。通常の解釈は、文房具店での発話にみられるたくいで、「その鉛筆」が種類を指しており、それと同じものを欲しいというものである（数量の指定がないのでデフォルトで一本欲しいという解釈になるのが普通だろう）。この読みでは、指示詞「その」はタイプを限定する¹²⁾。

(21) のもう一つの解釈は、「その鉛筆」が特定の個体（トークン）と解釈される場合でその特定の鉛筆が欲しいという解釈となる。この解釈が優勢になる発話場面は、たとえば「その鉛筆」が有名人によって使用された特別なものでファンがそれを入手したいといった状況である。こ

の読みでは、指示詞「その」はトークンを限定する。

第1節でみたように、Muraki (1974) は (2b) ((22a) として再掲) に (3b) ((22b) として再掲) を対応させている。

- (22) a. あの鉛筆を三本買っています。(= (2b))
 b. He is buying three of those pencils. (= (3b))

(22b) の **three of those pencils** は部分構造であるから「あの鉛筆」を個体の集合としてとらえていることになる。しかし、「あの鉛筆」をタイプ名詞として解釈した場合、(22a) はつぎの英文に対応する。

- (23) He is buying three pencils of that kind.

部分解釈とトークン解釈は意味論的に区別されるべきものであるが、(22a) の曖昧性が示すように、日本語では形式上の区別がないため、共起する動詞の語彙特性または文脈によっていずれかの解釈が選択されることになる。動詞の語彙特性によって文解釈が影響される例をもう一つみてみよう。

- (24) a. そのマンガの本を三冊読みなさい。(大木の (51b))
 b. そのマンガの本を三冊買いなさい。

大木 (1987) は (24a) に部分読みを与える。すなわち、「そのマンガの本」は、たとえば十巻からなるシリーズものを指し、FQ「三冊」がその一部分を指す。(24b) は動詞を「買う」に変えた最小対であるが、(24a) と並行的な部分読み (十巻のうちの三巻を買う読み) に加えてトークン読みも可能である。トークン読みでは「そのマンガの本」をタイプ名詞として解釈し、FQ「三冊」でそのトークンを指す。要するに、同じマンガの本を三冊買うという読みである。田中 (2000a) が主張するように、

(24b) でトークン読みが可能なのは、動詞「買う」が個体（トークン）について成立する行為を表すためである。対照的に、動詞「読む」はタイプについて成立する行為を指すため「*その本を三冊読んだ」といった文は容認されない。

数量詞遊離文のトークン読みについて、加藤（2003: 461）はつぎのように述べている。

後者は（＝「そのYが／をx個…」の形式）、意味上、指定されるのは種類であるから、この世に一つしかないような唯一存在物と解釈されてはいけない。

「x 個」は FQ を、「そのY」は FQ の先行詞を指すが、Y が唯一物の場合そのトークンは問題にできないという趣旨である。加藤はつぎのようにヒト名詞がこの形式と意味的に整合しないことを指摘している。

(25) *その人を三人呼んだ。（＝(13b)）

この言語事実は、Kaga（1991）において分析されている。Kaga はつぎの文法対立にもとづき FQ の先行詞についてヒト名詞とモノ名詞で数量詞遊離文の容認性に差がでることを観察している¹³⁾。

- (26) a. *花子とその医者をも三人知っている。（Kaga の（3b））
 b. 丸善がその本を十冊仕入れた。（Kaga の（4b））

Kaga によれば、この文法対立はヒト名詞とモノ名詞で基本レベルカテゴリーのレベルが異なるために生じる（ヒト名詞はモノ名詞よりも「個別性」(individuality) が重視される）。定名詞ではヒト名詞はモノ名詞よりもタイプ解釈を受けにくいいため、数量詞遊離文に生じにくいのである。

ここで、§3.1 でみた (20) ((27) として再掲) を再度検討する。

- (27) 「昨日、何してた?」「本屋に行って、前から欲しかった本を二冊買って、それから家でテレビを見ながらごろごろしてた」

部分読みは「前から欲しかった本」がたとえばA, B, Cの三冊からなる本の集合を指し、FQがそのうちのAとBを指す解釈である。一方、トークン読みは、購入した二冊の本AとBがいずれもタイプ名詞「前から欲しかった本」のトークンである、という解釈である。この場合、AとBは別なタイトルの本になるが、タイトルの違いは捨象され一つのタイプとしてみなされる。さらに、トークン読みにはもう一つの状況が想定できる。それは、「前から欲しかった本」が特定のタイプを指していると解釈し、そのトークンを二冊購入した状況である（「その鉛筆を三本ください」と並行的な解釈）。つぎのように指示詞「その」でタイプを限定すると(27)とは異なり一つのトークン読みしか得られない((21)の説明を参照)。

- (28) a. 前から欲しかったその本を二冊買って…
b. その、前から欲しかった本を二冊買って…

この読みでは、買った二冊の本は同一内容となるので、一冊は自分用でもう一冊はプレゼントや保存用などに買ったという状況において自然になる。

(27)と並行的な構造をもつ(4b)((29)として再掲)については第1節でFQの部分読みが可能であることをみた。

- (29) 前を走っていた乗用車が二台つかまった。

この文にも(27)のようにトークン読みが得られるだろうか。それは「前を走っていた乗用車」をタイプ解釈できるかどうかによる。関係詞節が「走っている」という一時的な動作の継続を表す述語を含むので(27)に

比べてトークン読みが難しいようだ。(29)の述部を、タイプ解釈を要求するものに変えると明らかに容認性が低下する。

(30)?*前を走っていた乗用車が生産中止となった。

したがって、(29)の総数読み（前を走っていた乗用車が二台だけである、という読み）は難しいということになる。このように FQ のトークン読み（総数読み）の可否は先行詞がタイプ解釈できるかどうかによる。

本節では数量詞遊離文の部分読みとトークン読みについて考察した。田中（2001）が指摘するように、FQ の先行詞の有界性によってどちらの読みになるか決定される。先行詞の定名詞が特定名詞句の場合には部分読みになり、先行詞の定名詞がタイプ解釈を受ける場合にはトークン読みになる。先行研究で対立がみられた数量詞遊離文の総数読みの有無については、総数読みはトークン読みとみなせることを示した。

4. N Q C 型

これまで Q ノ NC 型（「その三本の鉛筆を…」など）と NCQ 型（「その鉛筆を三本…」など）を考察したが、日本語にはもう一型、NQC 型がある。すなわち、「その鉛筆三本を…」のように名詞（N）と助詞（C）の間に名詞を量化する数量詞（Q）が生じる形式である。この型については、奥津（1996b）が定の NQC 型について考察している（「|」記号はポーズを表す）¹⁴⁾。

(31) 昔ある所に子豚が三匹住んでいました。ところがある日 その
子豚 | 二匹が 狼に食われてしまいました。（奥津の (8a)）

奥津によれば、NQC 型は (32) のいずれかの構造をもつという。

- (32) a. [その [子豚二匹]] (奥津の (9a))
 b. [その子豚 [二匹]] (奥津の (9b))

(31) の「その子豚 | 二匹」は (32b) の構造をもち、「子豚」のみが定名詞化し、「二匹」は不定数量詞で定名詞の部分数量を表す (部分読み)。奥津はこの解釈をもつ NQC 型が「その子豚の中の二匹」や「その子豚の二匹」のような部分構造 (N ノ QC 型) の下位類であると主張する¹⁵⁾。

(31) を「その子豚二匹」のようにポーズなしで読んだ場合、その構造は (32a) となり、「子豚二匹」全体が定名詞化する (子豚の総数は二匹になる)。ただし、(31) の第一文では子豚の総数が三匹であると述べられているのでこの文脈に当てはまらない読みである。

奥津は FQ を数量詞移動規則によってとらえる分析を提案しており、(31) はつぎの数量詞遊離文の基底構造であると主張する。

- (31') 昔ある所に子豚が三匹住んでいました。ところがある日 その子豚が 二匹 狼に食われてしまいました。

§3.1 でみたように、(31') は部分読みになる (FQ 「二匹」とその先行詞「その子豚」が部分-全体の関係を結ぶ)。派生 (derivation) は意味変化を伴わないことから、奥津 (1996b) の分析において、NQC 型の部分読みこそが NCQ 型 (数量詞遊離文) とのつながりの要と言える。しかし、筆者の直感では、(31) において「その子豚」の総数が二匹となる読み (総数読み) は得られるが、Q の部分読みは認めがたい。

NQC 型が NCQ 型のように部分読みを許すかどうかについては、言語データのさらなる調査が必要だが、少なくとも NQC 型は NCQ 型とは異なる意味特性をもつことを指摘しておきたい。

まず、§3.1 でみたケーキの例に当てはめると、NQC 型は NCQ 型と異なる文法性を示す。

- (33) 昨日、母がケーキを2個買って来た。
- a. *今日、私はそのケーキを2個食べてしまった。(= (18a))
 - b. 今日、私はそのケーキ2個を食べてしまった。

(33a) の NCQ 型は、FQ が先行詞「そのケーキ」の一部分を指すため、第一文の内容（ケーキの総数が二個である）と矛盾するのであった。対照的に、(33b) の NQC 型は第一文に続けることができる。このことから、NQC 型は総数読みをもつことがわかる。ただし、§3.2で数量詞遊離文「前から欲しかった本を二冊買って…」の解釈名に用いた「総数読み」（＝トークン読み）とは意味合いが異なる。(33b) の総数読みではQが先行詞「そのケーキ」の総数を指すが、数量詞遊離文の「総数読み」ではFQは先行詞「前から欲しかった本」（タイプ）の数ではなく、購入した本（トークン）の総数を指す。

また、§3.2でみた「集合的認知」と「分散的認知」の区分でいえば、NQC 型は前者を反映するようだ。

- (34) 私の研究室にはパソコンが二台ある。
- a. 今朝、その二台のパソコンが突然故障した。(= (10a))
 - b. *今朝、そのパソコンが二台突然故障した。(= (10b))
 - c. 今朝、そのパソコン二台が突然故障した。

(34b) は、第一文で二台のパソコンを集合的に認知する根拠が与えられているにもかかわらず分散的認知の形式を用いているために容認性が低下するのであった。(34c) の NQC 型では第一文と意味的に整合することから、分散的認知ではなく、集合的認知を反映していることがわかる。

NQC 型におけるNとQの意味関係はつぎのようにまとめられる。

NQC 型文	構 造	N と Q の意味関係
その子豚二匹が狼に食われてしまいました。	「子豚二匹」全体が定名詞化	N の総数 = Q (≠タイプトークン)
	「子豚」のみ定名詞化 「二匹」は不定数量詞	全体－部分

NQC 型の総数読みは得やすいが、部分読みについては容認性に個人差が認められる。筆者が日本語母語話者30名（大学1年生）を対象に行ったインフォーマント調査によると、「その子豚二匹が…」の解釈について、部分読みが不可能であるとする回答者が7割（21名）、可能とする回答者が3割（9名）であった。NQC 型の解釈については稿を改めて論じたい。

5. 複合名詞句を先行詞とする FQ

田中（2000b）は FQ の先行詞が複合名詞句である場合について考察している（[] は関係詞節を表す）。

- (35) a. 山田はそこで[その後の人生を一変させる]一冊の本を買った。(田中の (1a))
b. ?*山田はそこで[その後の人生を一変させる]本を一冊買った。
(田中の (1b))

田中は (35a) の Q ノ NC 型は容認されるが、(35b) の NCQ 型（数量詞遊離文）は容認性が低下することを観察している。ただし、つぎの例が示すように関係詞節の内容によっては NCQ 型でも許容される場合がある（下線は筆者による）。

- (36) [あなたの人生を一変させた]本を一冊挙げてください。(田中の (2))

田中は関係詞節の時制に注目し、(36)ではタ形であるため主節の事態が関係詞節の事態に後続するが、(35b)ではル形であるため主節の事態が関係詞節の事態に先行し、さらに二つの事態が密接な関係をもつと指摘した。具体的には、(35b)の主節の事態「本を購入すること」が関係詞節の事態「その後の人生を一変させること」を引き起こしている（「その後」が本の購入時点を指すことから二つの事態が因果関係をもつ）。このように主節の事態と関係詞節の事態が因果関係を結ぶ場合には関係詞節の主名詞からの FQ は容認されない¹⁶⁾。

田中 (2000b) は、(35b) の言語事実にもとづいて「主節の事態と関係詞節の事態が因果関係を結ぶことで（関係詞節の）主名詞のタイプ解釈ができなくなる」という意味制約を仮定しているが、その制約の由来について論じていない。以下では、主節と関係詞節の因果関係と主名詞の解釈の相関関係について論じる。

(35b) の FQ 「一冊」とその先行詞「その後の人生を一変させる本」の関係は、第3節でみたように、タイプトークンの関係もしくは部分－全体の関係になるはずである。しかし、実際にはそのどちらも成立することはない。

まず、部分－全体の関係について考える。「その後の人生を一変させる本」を特定名詞句と解釈すれば FQ 「一冊」と部分－全体の関係を結ぶことになるが、具体的な状況を考えてみるとこれは不可能であることがわかる。たとえば、「その後の人生を一変させる本」が二冊の本 A、B であるとする、A、B のどちらも「その後の人生を一変させる本」ということになるのだが、A を買ったとすると B が「その後の人生を一変させる本」の資格を失うことになる。すなわち、「その後の人生を一変させる本」とは主節の購入時（一時点）に依存するため、その一部分を選んでしまうと選ばなかったメンバーは「その後の人生を一変させる本」でなくなってしまうのである。A と B の両方を「その後の人生を一変させる本」にしたいのなら、つぎのように言わなければならない。

- (37) a. 山田はそこで〔その後の人生を一変させる〕二冊の本を買った。
 b. 山田はそこで〔その後の人生を一変させる〕本二冊を買った。

(37a) は Q ノ NC 型, (37b) は NQC 型であるが, いずれも本を二冊購入して, それが人生を変えることになったことを表す。

では, (35b) と並行的な構造をもつ (36) が部分読みを許すのはなぜか。それは「あなたの人生を変えた本」の指示対象が主節内容に依存せずに決まることによる。たとえば, 二冊の本 A と B が人生を変えた本だとしたら, それが同一時点で買ったかどうかにかかわらず「人生を変えた本」のメンバーになれるのである。この点で主節に依存して指示対象が決まる (35b) とは決定的に異なる。

以上をふまえると, 主節の事態と関係詞節の事態が因果関係にあることと部分読みが可能であることは相補的な関係にあると言ってよい。

つぎに, タイプトークンの関係を考える。タイプとは定義上, 時間と空間の制限を受けない。したがって, 関係詞節の内容に「その後の人生」(つまり「購入後の人生」) とあり主節事態の成立時点に依存していることから主名詞のタイプ解釈は不可能になる。つぎのように, 関係詞節が主節に依存しなければ主名詞からの FQ は容認される。

- (38) a. [飲むと悪酔いする] 酒を一本飲んだ。
 b. [購入後のメンテナンスに費用がかさむ] 車を一台購入した。

(38a) では関係詞節と主節に「飲む」という動詞が含まれ, 主節時点を関係詞節が受けているようにみえるが, この場合, 関係詞節は必ずしも主節時を受けていないことに注意すべきである。すなわち, 「飲むと」という表現は条件を表しており, その条件に主節が合致しているだけである。「飲むと悪酔いする酒」とは主節に依存しなくてもそのタイプが確立する。たとえば, ある種の酒を飲むと悪酔いしてしまう人がいれば,

その酒を「飲むと悪酔いしてしまう酒」で指すことができる。この表現はタイプ名詞の解釈を受けている。

(38b) では関係詞節の内容に「購入後」とあり、これは主節時点を受けているようにみえるが、実はそうではない。購入した結果としてメンテナンスに費用がかさむのではなく、誰が購入したとしても、購入後にメンテナンス費用がかさむような車種（タイプ）を問題にしている。この解釈では「購入後のメンテナンスに費用がかさむ車」をタイプ名詞とみている。

以上をまとめると、関係詞節の内容が主節の内容に依存する場合、主名詞とそれを先行詞とする FQ は部分－全体の関係もタイプトークンの関係も結べない。したがって、数量詞遊離文の容認性が低下するのである。

6. 結 論

本稿では、遊離数量詞 (FQ) とその先行詞の意味関係について考察した。先行詞の有界性に応じて、FQ と先行詞の意味的關係は部分－全体の関係か、タイプトークンの関係のいずれかになる。先行詞がタイプ解釈を受けるどうかで FQ との意味関係が変わる。タイプ名詞は非有界的 (unbounded) であるため、部分－全体の関係にはかかわらない。

NQC 型については、奥津 (1996b) は総数読みと部分読みの二つを認めるが、後者については容認性に個人差がみられる。少なくとも、NQC 型は総数読み (≠ トークン読み) をもつ点で部分読みとトークン読みしかもたない NCQ 型 (数量詞遊離文) とは異なる振る舞いをすることを指摘した。

FQ の先行詞が関係詞節を伴う場合、関係詞節の内容と主節の内容の論理関係が重要になることがある。田中 (2000b) は関係詞節が主節と因果関係を結ぶ場合に主名詞からの FQ の容認性が低下することを指摘している。本稿ではその要因について論じた。数量詞遊離文には部分読みと

トークン読みが可能だが、主節と関係詞節の内容が因果関係にある場合、いずれの読みも成立しない。部分読みは、主節に依存して決まるグループの一部を取り出せないことから排除される。また、トークン読みは、「タイプは時間・空間的な制限を受けない」というタイプ概念の定義上、主節の事態に依存するタイプを規定することができないために排除される。

NQC 型（特に定のもの）については、NCQ 型（数量詞遊離文）に比べて取り上げられることが少ない。NQC 型はその解釈に個人差が観察されるために研究対象になりづらいのかもしれないが、NCQ 型や Q ノ NC 型と比較することで NQC 型の意味機能を解明することを今後の課題としたい。

注

- 1) 英語にも数量詞遊離文があり、つぎの (ib, c) のように普遍数量詞 (all, both, each) が遊離する。
 - (i) a. All the students have passed the exam.
 - b. The students *all* have passed the exam.
 - c. The students have *all* passed the exam.
- 2) 英語の FQ の分析も、FQ を移動とみるか、基底生成とみるかで二分される。移動分析については、Sportiche (1988) 以降、FQ を数量詞の移動ではなく、その先行詞が移動するときに Q が残留 (strand) したとみる分析が主流である。
- 3) (2a, b) は原文ではローマ字だが、和文に変えてある。
- 4) 井上 (1977) はつぎの例のように定名詞 (波線部) に関わる連体数量詞と FQ (それぞれ下線部) が同時に生起する可能性があることを指摘している。
 - (i) a. 並んで走っていた数台のトラックがガードレールにみんなぶつかった。(井上の (49))
 - b. 彼は積んであったたくさんのみかん箱を路上に二, 三個投げ捨てた。(井上の (50))

(ia) の FQ 「みんな」と (ib) の FQ 「二, 三個」を連体数量詞に戻せないことから、井上は FQ の移動分析に反論している (「*数台のみんなのトラック」,

「*たぐさんの二、三個のみかん箱」。

- 5) (5a) でも「そのりんご」が種類を指していると解釈すれば、トークン読みが可能である。その場合、FQ「3つ」は部分数量を指さない。詳しくは第3節でみる。
- 6) 田中(2001)は「100ページ」のような「内容数量詞」についても考察している(「内容数量詞」とは北原(1996)の用語で「単一で構成されるものの中身の量をあらわす数量詞」を指す。これに対して、「二本」のような数量詞は「個体数量詞」と呼ばれる。)。
 - (i) 太郎は春休み中にその本を100ページ読んだ。
 - (ii) 太郎は春休み中にチョムスキーの本を100ページ読んだ。
 (i) では、FQ「100ページ」の先行詞が定名詞「その本」で FQ は部分読みになる。(ii) では FQ の先行詞「チョムスキーの本」を特定名詞句とみるか、タイプ名詞句とみるかで FQ の解釈が異なる。前者では「チョムスキーの本」は LGB のような書名に置き換え可能で、FQ は部分読みになる。後者では FQ の先行詞がチョムスキーの複数の著書と解釈され、FQ はそれらの本について読んだページの合計をあらわす(「ページ」は「本」のトークンではないのでこの読みはトークン読みではない)。このように内容数量詞の場合、個体数量詞とは異なる読みが生じる場合があるため、本稿の考察対象から外す。
- 7) 「割合数量詞」は長谷川(1994)の用語で、ほかには「すべて」、「一部」、「大部分」、「一割」、「20%」などが含まれる。また、加賀(1997)は「母集合を前提とし、その値との比率を問題にする」数量詞(「多く」など)を「比率的数量詞」と呼び、そのような前提をもたない「基数的数量詞」(「たくさん」など)と区別することで部分否定の分析を行っている。
- 8) Kaga(1991)はつぎの例を指摘している。
 - (i) *花子が二本飲んだビールはぬるかった。
 FQ「二本」は個体数量詞で、主名詞「ビール」はタイプ名詞と解釈される。したがって、場面述語「ぬるかった」と意味的に矛盾を起こす。
 つぎのようにタイプ名詞と意味的に整合する述語を添えると容認性が回復する。
 - (ii) 花子が二本飲んだビールを買いに行った。
- 9) 「二冊とも」のように FQ が副助詞を伴った場合は、「個体数量詞」が注7でみた割合数量詞の機能を帯びる。加藤(2003)はこのような数量詞を「数量詞句」と呼んで単独の数量詞とは区別する。つぎの加藤の例では数量詞「20名」から「以上」を省くと容認性が低下する。
 - (i) a. 目標金額を達成するには、教官が全員寄付し、その上、学生から

20名以上集めなければならない。(加藤の (47))

- b. ???目標金額を達成するには、教官が全員寄付し、その上、学生から
20名集めなければならない。(加藤の (48))

一般に「に」や「から」を伴う名詞からの数量詞遊離は許容されないとされている。(ia) が容認されるのは数量詞「20名」が「以上」を伴っているためであることが (ib) の不自然さから裏付けられる。数量詞句については §3.1 でもふれる。

- 10) 加藤は「今朝、そのパソコンが二台とも突然故障した」のように FQ に副助詞「とも」を添えると容認性が回復することを指摘している (注9を参照)。
11) 英語の部分構造 (partitive construction) は A of B の形式をもつが、B が定表現の場合、同様の制約がみられる。

(i) two of the students

(i) では the students は少なくとも三人以上の学生の集合を指さなければならない。

- 12) トークンが複数存在していても「その」で限定されるタイプの数は一つであることに注意すべきである。小早川 (1997) が指摘するように、「それらの」にするとタイプの数が複数になるため、(ib) のようにトークンの数の指定が一つだけでは容認されない。

(i) a. そのペンを三本ください。

b. *それらのペンを三本ください。

cf. それらのペンを三本ずつください。

FQ「三本」を数量詞句「三本ずつ」に変えると容認されるのは、当該表現がタイプの数に応じたトークンの数を指定する表現だからである。

- 13) 例文は原文では英文である。
14) 神尾 (1977) は数量詞の量化対象の名詞 (説明の便宜上、FQ の場合と同様に「先行詞」と呼ぶ) が不定名詞である場合を取り上げている。

(i) a. 私は年賀葉書二百枚を頼んだ。(神尾の (16))

b. 学生三人がつかまった。(神尾の (17))

- 15) 奥津 (1996b) は、不定名詞句「子豚二匹」と定名詞句「その子豚二匹」が線形順序でいえどもともに NQC 型になるものの、意味的には明確な違いがあることから後者を「N / QC 型」と呼んで区別する。本稿では表記の簡略化のため、N / QC 型も NQC 型と呼ぶことにする。

- 16) 「主名詞」とは関係詞節によって修飾される名詞を指す。英語ではそれは「先行詞」と呼ばれるが、日本語では関係詞節が修飾する名詞は関係詞節に後続することから「先行詞」ではなく、「主名詞」を用いる。

参 考 文 献

- 長谷川重和 (1994)「数量詞の修飾について」,『日本語・日本文化』第20号,大阪外国語大学, 1-17.
- 井上和子 (1977)「日本語に『変形』は必要か」,『月刊言語』第6巻9号, 100-109.
- 井上和子 (1978)『日本語の文法規則』,大修館,東京.
- Kaga, Nobuhiro (1991)“Humanness and the Kind-level Interpretation,” *Tsukuba English Studies* 10, 51-67.
- 加賀信広 (1997)「数量詞と部分否定」,廣瀬幸生・加賀信広『指示と照応と否定』, 91-178, 研究社,東京.
- 神尾昭雄 (1977)「数量詞のシンタックス」,『月刊言語』第6巻9号, 83-91.
- 加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』,ひつじ書房,東京.
- 北原博雄 (1996)「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」,『国語学』第186号, 29-42.
- 小早川 暁 (1997)「『それらの+名詞』と置語名詞の意味論」,関西言語学会第22回大会(京都大学),口頭発表.
- Muraki, Masatake (1974) *Presupposition and Thematization*, Kaitakusha, Tokyo.
- 大木 充 (1987)「日本語の遊離数量詞の談話機能について」,『視聴覚外国語教育研究』第10号,大阪外国語大学, 37-67.
- 奥津敬一郎 (1969)「数量的表現の文法」,『日本語教育』第10号, 42-60.
- 奥津敬一郎 (1996a)「連体即連用? 第3回 数量詞移動 その一」,『日本語学』第15巻1号, 112-119.
- 奥津敬一郎 (1996b)「連体即連用? 第4回 数量詞移動 その二」,『日本語学』第15巻2号, 95-105.
- Sportiche, Dominique (1988)“A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure,” *Linguistic Inquiry* 19, 425-449.
- 高見健一 (1998)「数量詞遊離」,神尾昭雄・高見健一『談話と情報構造』,第Ⅱ部第3章165-196, 研究社,東京.
- 田中秀毅 (2000a)「関係詞節と部分構造」,『JELS (日本英語学会研究発表論文集)』第17号, 231-240.
- 田中秀毅 (2000b)「日本語における複合名詞句からの数量詞遊離」,『言語文化論集』第53号,筑波大学, 63-77.
- 田中秀毅 (2001)「個体数と内容量」,中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェイス・上』, 399-409, くろしお出版,東京.